

編 集 後 記

秋が駆け足でやってきた頃に、長島愛生園主催の「ハンセン病問題のこれからを考える国際シンポジウム」に一聴衆として参加してきました。2004年度からの公衆衛生・予防医学系の授業の一環で、見学・実習を実施するにあたって、長島愛生園にも毎年（カリキュラム改革で1年抜けた年度がありました）伺わせていただいています。今回のシンポジウムには、マレーシア、フィリピン、ブラジルそしてオーストラリアから、研究者や支援者、さらに元収容患者さんなどが参加され発言されました。また会場にはパネル展示もありましたが、それは各国（欧州、アフリカ、南北アメリカ、東南アジアなど余すところなく）の収容施設でしたが、すべて島！ やはり、島に隔離という政策は世界中で行われていたということが実感されました。ブラジルからの元患者さん、そして収容を余儀なくされていらした方は、やはり人間として対峙してほしい、ということ強く訴えられていました。そして、今回のシンポジウムの特徴は、こうした収容所跡、日本ですと解放されてからも行き場のない、後遺症に苦しむそして高齢となった方々がもうその場でしか生活を営めない場となっていますが、そういった施設を遺産として残そうということも一つのテーマでした。フィリピンでは、世界遺産登録を目指す取組を遂行している大学院生の発表もありました。勿論、人類の負の遺産ですが、アウシュビッツも原爆ドームもその通りで、二度と人類が犯した過ちを繰り返さないために、周知することの重要性を問うものなのです。ただ、日本では収監施設を再建して、展示施設として残そうという動きもあるようですが、そこは少し微妙な部分もありますね。病気が元で日常生活が損なわれたり社会生活に不便が生じるのは、風邪を引いて欠席したりすることでも表れます。しかし、疾病が元で社会的弱者に貶められるかということ、それはあってはならないはずですが、しかし、ハンセン病は国の隔離政策、さらにはそれを推進した医師の存在などなどの問題も含めて如実に表れてきますが、環境保健の授業などをしていると、どんな場面でも類似の現象に、講義の中で触れざるを得ない部分が出てきます。水俣病もそうです。今年は、水俣病患者の支援に全力で生涯を捧げられた原田正純医師が逝去された年でもありました。発病者が部落の中で、漁民たちの中で、それに加えて市民の中で、複雑に絡み合う人間の赤裸々な感情と利害などに揺れ動かされる強欲の中で虐げられたり、絶望の淵に追いやられたりしたことは、文学や映像・画像の中でもうかがい知れる部分があります。水俣については、もう一つ、チツソが分社化してもう補償を支払うべき会社がなくなってしまったこと、そして認定申請期限が今年の9月末で終了してしまったこと。これらも水俣病を語る中で、非常に大きな曲がり角であった2012年だったと感じられます。財源に限度があるとはいえ、分社化を認め認定期限を設定した国という立場。僕らはそれらの事実から、それぞれに何かを感じてよいのではないのでしょうか。薬害AIDSもそうでした。そして、福島県からの罹災者が転居した後で、子供たちが「放射能がうつる」とまで言われてしまっていること（親が云っているから子供が云うのです）、人間というのは、何も歴史からは学べないどうしようもない種なんだなあと、嘆息しか出てきません。原発再稼働にしても、種々の問題が絡んでいる様です。戦後、武力という礎を失った日本人は、経済力のみで国民全員の目標を向かわせることで国力を高めてきましたが、その間に、そして40年を経てからのアスベストによる中皮腫の問題。

さて、今、医学医療の徒としての私たちは、何を感じ、何を考え、リアルタイムでその現場に居られない中でも、書物や映像などで自分たちの琴線に触れるものを求めることも必要なのでしょう。冒頭で記したハンセン病のシンポジウムには、中四国の国際医療を考える医学生グループも20人近く参加し、その後、午後には邑久光明園へそして翌日は長島愛生園の見学などをして過ごしたと聴きました。iPS細胞の山中教授がノーベル賞を受賞され、医学医療分野の科学技術振興に国も積極的に資金を出す姿勢を見せていますが、山中先生がいつもインタビューなどで「疾病に苦しむ患者さんに役立つように」とおっしゃる姿は、本当に美しいと感じられます。

街ではそろそろジングルベルが囁くように、そして時には華やかに恋人たちを包み込んでいくのでしょうか。粉雪でもちらつければまさにホワイト・クリスマス、見つめ合う二人には世界はもうそこにしかないのかも知れません。勿論、見つめれば愛、そして二人は心も体も抱きあい触れ合って、思いやり慈しむことに時間を費やしていくことなのでしょう。ならば、すこしずつ、その愛を、慈しみを、健康に苦しむ人たちにも、注いでくれるなら……。

(学長補佐 大槻 剛巳)